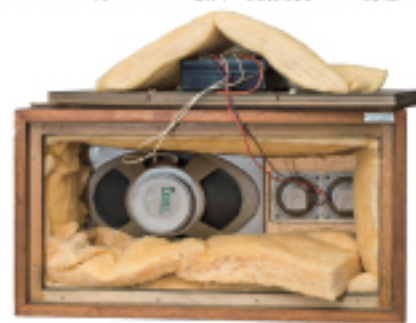




Model-319、Model-DSL 529 のフロントグリル。どちらのモデルも細い金属製のプレートを組み込んだ特注のグリルが採用されており、前面を殆ど金属に覆われていて透過率は40%もないように見えるが、これはユニットの前面に負荷が掛かるアコースティックレンズの役目の機能を果たした構造になっている

### Model 319

DSL-529でも使われていたフルレンジユニット92390のセンター・トゥイーターの99110Bが2本のバーで1基取り付けられた同軸2ウェイユニットで、専用のL / Cネットワークがフレームに装着されている。このユニット1基が搭載されたキャビネットは若干小振りながらModel-529同様に密閉型のアコースティック・エア・サスペンション方式が採用されている。1960年代のEMIのレコードは、Model-319、DSL-529と共にこのスピーカーを通して音決めされており、またレコーディング現場でも評価が高く、英BBCや米キャピタルレコードでもモニターとして使用されていた。



Model-DSL 529の内部写真。92390-AL 1本とその横にトゥイーターが2基装備され、大きな黒い箱のネットワーク X / O 4500 につながっている

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号は1960年代に発売されたEMIのスピーカーをご紹介します。

本文 / 田中伊佐資  
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)  
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

## ■ 26回 EMI

EMIは1931年にイギリスのレコード会社である英コロムビアと英グラモフォン (HMV) が合併し、Electric and Musical Industries Ltdとして設立された。同社は傘下に多数のレーベルを抱える総合会社として存在しており、同名の「EMI」というレーベルが設立されたのは1972年のことで1973年にEMIは東芝音楽工業株式会社 (東芝の独立レーベル) に資本参加し、東芝EMIと改称。1960年代にはEMIのレコーディングディレクターであるウォルター・レグが当時のスピーカーの音に満足できず自社開発を提案、スピーカー等のオーディオ機器も自社開発していた。



### Model-DSL 529

1960年代にEMIが独自に開発した複合楕円コーン型フルレンジユニット1基+トゥイーター2基を搭載。密閉型を採用し、ARでおなじみのアコースティック・エア・サスペンション方式のキャビネットに収納されている。インピーダンスは40の小型モニターで、フルレンジユニットはあのDECCAデカに搭載されている92390とはほぼ同型の320x165mm楕円ユニットで、センターがアルミ振動板のメカニカル型構造になっている。トゥイーターは99110Bで7cmの紙コーン製。2個は若干再生帯域を分けて使われており、クロスオーバーユニットはX.O.4500 / 4型が搭載されている。

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

EMI



92390-CL 同軸ユニットの正面写真。Model-319 に搭載されているユニットで、フルレンジユニットのエッジ部分はゴム製の素材となっている。これはModel-DSL 529 のユニットも同じである



Model-319 内部の写真。同軸タイプのユニット92390-CLのフレームに L / C 型ネットワークが装着されている



92390-CL 同軸ユニットの正面写真。Model-319 に搭載されているユニットで、フルレンジユニットのエッジ部分はゴム製の素材となっている。これはModel-DSL 529 のユニットも同じである

99110Bトゥイーターの正面写真直径5cmほどの紙製の振動板となっている手頃でいい感じの大きさが魅力物音が振き立てられるスピーカー



このところ物欲の虫がざわざわと騒ぎ出してきて、どうもいけない。ほくはオーディオについては1セット集中主義で、サブシステムとか寝室システムとかを持たないタイプなのだが、長いことこの連載を続けてきたこともあり、ヴィンテージで一貫した機器が欲しくなってきた。フランは何もないのだが、ともかく置く場所がないから、スピーカーもアンプも一切合切が小型であることが望ましい。

そこへ来て、今回はEMIのモニタースピーカー、しかも手頃でいい感じの大きさ(価格も射撃圏内)だ。のっけから興味津々だった。

今回は2種類あり、まず出てきた319というモデルは、楕円トゥイーターとそのフロントにトゥイーターを付けた同軸ユニットを採用している。因は違えど、楕円はドイツのイソフォンやRFTで聞いた記憶があり、イメージはかなりいい。岡田さんは、さて今日はなにをかけるか悩んでいる。もうその段階でだいたいの様子がわかってきた。

ビル・エヴァンスの定番「ワルツ・フォー・テビィ」でスタート。しとやかで英国スピーカーに共通の味わい深い洗みがある。これは貴族の音。原音忠実再生ではないが、心の隅隅にすっとさりげなく入ってくる。何度も聴いてよく知っている「デビィ」だが、またひとつ新しい

風合いを感じた。

EMIとなればクラシック。ではなくてはくはビートルズ。勝負どころとしているジョン・レノンの声を聴かないと始まらない。曲は「ノルウェーの森」。声にうるおい感があつて色っぽい。ビートルズ・オーディオを極めようとしたらちよつと驚きがある英国製スピーカーになるんだろうななんて思った。

ジュリー・ロンドンのハスキー・ヴォイスもまた愛があつていい。同軸でしかもトゥイーターがウーファーと同じ紙素材なので、すごくまとまりがいい。

ここで少し大きな529が登場。これは同軸ではなく楕円のトゥイーターにウーファーという構成。比べる意味もあつてそのままジュリーをかけてもらうと、中高域の分解能がよくなり、すつきりと整理して聴かせる。319が持っていた演出が減退してハイファイ調になった。スタジオで使うモニターとしてグレードはアップした。しかしヴィンテージ・オーディオの価値判断は単純ではなく、319の付帯音があるような、含みがあるような音にもそこが惹かれる。

最後はスコットランド室内管弦楽団のモーツァルトで比べてみる。弦の響きは間違いなく529が抜群にいい。この大きさでこんなに格指な音がするもんなかなと思った。岡田八目というように、ロックやジャズが好きなのは言うのだから間違いないと思います。